あつし塾長の

子のやる気 親の気づき

○○57

第3章・ゆとり教育世代の見えない学力

親の経験 子には〝歴史〟

世代間ギャップ

先週の理科の時間、「オームの法則」を予習させていたとき「回路を流れる電流は分かる気がします。でも電圧って苦手です」と中2の女の子が独り言のようにくじけそうな気持ちを話してくれました。「電圧って、乾電池に書いてるよね」と私がヒントを言うと「乾電池って…あまり見たことありません」と。なるほど、最近の子どもたちは日常生活で乾電池を必要としないのだと気付き、教室に常備している懐中電灯から単1電池を取り出して、教室のみんなに「さて、何ボルトでしょうか」と質問してみました。まず男子が「ふてぇー（太い）」と一言。次に「5ボルト」、「10ボルト」、「50ボルト」…と。次に単3電池を取り出して同じ質問をしたら「これ、知ってる！技術家庭で卓上スタンド作って、それを毎晩使って読書してますから」と女の子たちが答えました。私は「へぇ、じゃ単3電池だとすぐ交換するんでしょ？」と聞いてみました。すると「えっ？　LEDだから交換したことありません」と言われてしまいました。

私は「家庭用電気は？」と続けてみました。「100ボルト」。これは全員が正解でした。「では冷房は？　新幹線は？…」という問いには全員「…」。「新幹線は1万ボルトを超え、2万5千ボルトだぞ！」と力説しても、子どもたちは「…」。騒ぎもせず、真面目に聞いています。「1万ボルトに触れようとしたら、さてどうなるかな？」と想像力を駆り立てようとわざと極端な例を話してみました。「感電…かな？」誰かが言いました。「実は感電する前に人間は、跳ね飛ばされて、柱や壁に激突して命を落としたりします」と〝落ち〟を言ったところで、「ハハハ」と軽い笑いが起きました。（私は「君の瞳は1万ボルト」のヒット曲の話はやめておきました）

異文化いかに理解するか

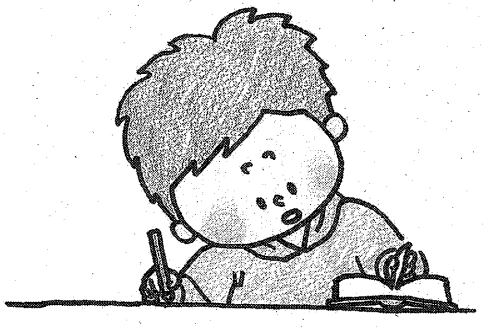
確かに、ゲーム機や携帯電話の電池は、ボタン電池だったり、充電ができたりと便利で安全な物に進化してきました。我々親の世代が体験した乾電池の液漏れや冷蔵庫に保管した方が長持ちするという生活の知恵についての話は、子どもたちには〝歴史〟としてしか受け取ってもらえなかった気がします。

ゆとり教育世代の塾は、受験に必要な「オームの法則」を教え、難問を解かせれば良いだけではなくなってきました。20年程前、塾を開いた頃、国語で「黒い鉄の塊がシュシュと音を立てて…」という表現で「この鉄の塊はさて何でしょう」と「蒸気機関車」を答えさせる読解の問題が正答率の極端に低い〝難問〟だったときも、世代間のギャップを感じたのを思い出しました。

私は今年51歳になります。我が家では祖父母の世代、私たち親の世代、子どもの世代は25歳ぐらいずつ離れています。この世代の間にある異文化をどのように相互に理解していくのかが、実は〝ゆとり教育世代〟の家庭教育の鍵なのかもしれません。

（畑山篤＝志学塾塾長）

by yoriko



教育

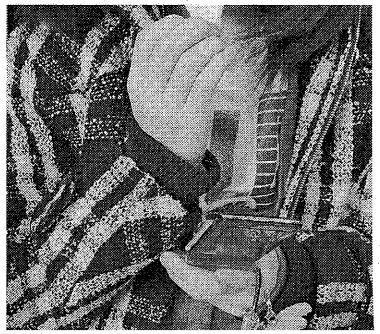
親も知らない プロフ

子どもとケータイ ①

朝起きたら真っ先に携帯電話を手に取り、プロフのメッセージをチェック―。利用者は約71％に達するという調査もある。

多くの子が自分の素顔を公開している。「危険とは思わない。もし気付かれて声を掛けられたら、うれしい」とサキ。目の周りに濃いメークをして、携帯カメラを上にかざして撮った自慢の写真を載せている。

「いい」



ねむくなんか

作

自然、理数

東京年にオア（東31万人が直営の科の中に思議に触

無料の

は、ニュ

を時系列

究儀」が

大人の

ていたフク

でも、すぐ

ママに

言われま

「ねむく